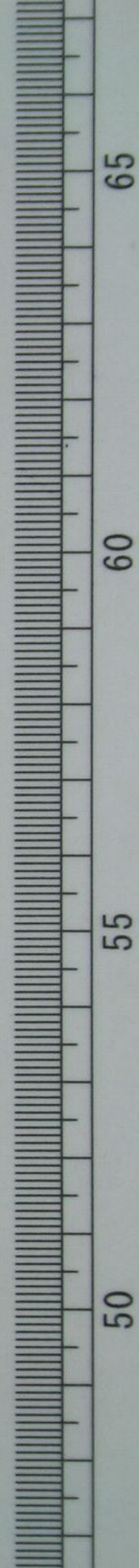
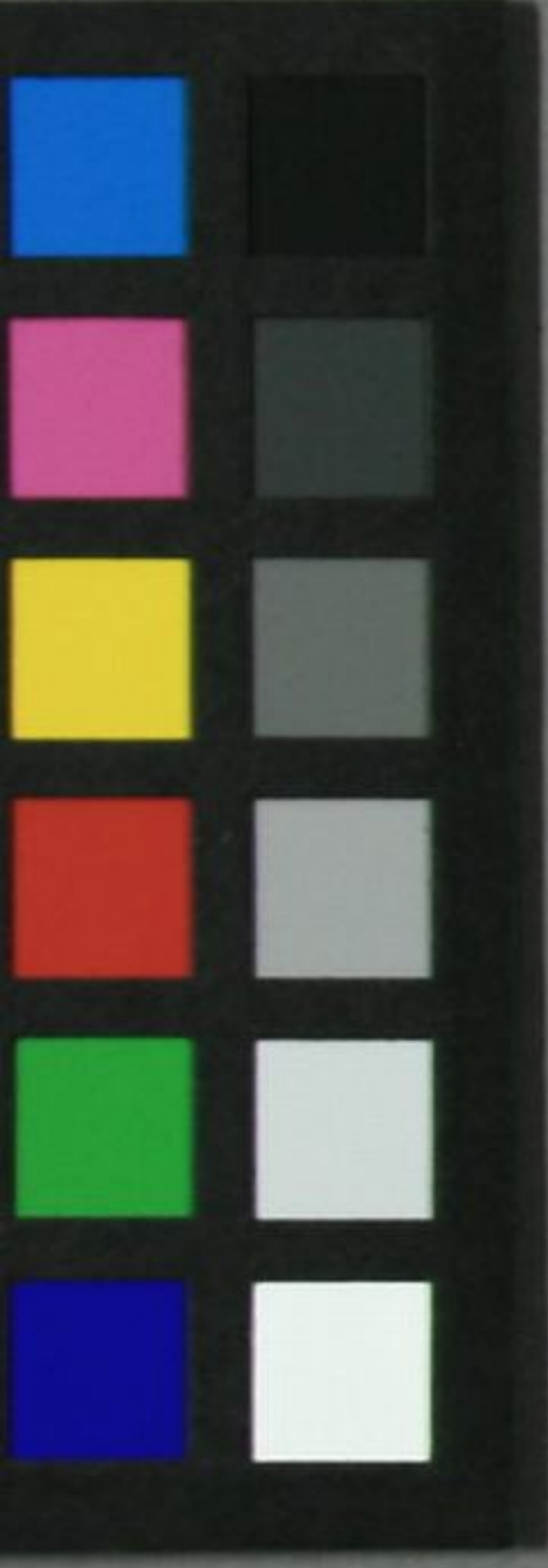


浮世形六扇屏

全



A 393

ACCOUNT
OF
A JAPANESE ROMANCE.

明治己巳歲初冬

浮世形六扇屏

松園藏版

48-7563

浮世形六枚屏風

柳亭種彦 著
松園梅彦 閱

昔々關東の官領濱名入道の一族、網乾アホシ多門太郎カヌヨシ買好とつゝ者、所々々々上總の國半國を領し、文を好み武に長じ、名々の家来も多し、所々々々威勢イキホシおそろく官領、相州鎌倉小袋、阪の傍ナカ、善美を盡したる館を構へ、又大磯金澤、あんど所々々遊アソビするの亭を設け、つと々々々々富々

浮世形六枚屏風

るところまでを凡そ三十間もゆくんぞ何氣なく去ひつづる然一人の侍まゝ答ぬ否鳴とつゝ者も鶉も等しき小鳥あり斯く鮮明も看ゆる二十間よりよも過じと答ふるも以前の侍頭を掉入々の咲く聲も怖れもやらぬ立ちゆく遙うも隔たる験あれややく試うも拳をつひ小的を射るぞ心てたらし見るとさう遠くを覺へじと兩人も去ひつゝ此争ひ更も果つるやうも見えぬ時よ買好が近習の士水間宇源太が躬同苗島之助その歳やうやく十四歳御

側きつゞぬの小扈性も今日もお供も在りて二人が前も進み出先づ暫く此争ひを止り給へ某が細矢を以て遠近を測り見らばしと袴の稜を高くも揚た弓も矢憂もさう番へよつとつゞぬと發てど箭も危くも鳥の脊をさうて蘆間も止中も鳥も愕き飛去り多門太郎大ひも怒る汝若輩の身代以て古老の武士をさしおと人もたぬまぬでしかたやまらうへ鳥を射損じ面目あくる思はぬやとさうぐも叱り給へ鳥之助も其怒り面も顛れ弓を側へも撲地

と擲めけ彼矢採て来る處しと僕も去ひ付くる
 こと何れもあらずに澤下立ちやうくして
 披ひと金件め矢をきし出せぬ嶋之助手に把り
 掲更に懼るゝ氣色もあらず主人の前より進み出鳥
 のおま居る其處を近しとつひ遠しと云ひ二人
 が争ひ果しあらず其間を測り争論を鎮め
 んとぞんじ始めよと遠近を量んとぞ申つと
 鳥に射中んとぞ申さばこれ御覽候へ夫を故に
 根矢を用ひた木樸頭の墓目めうちへ鳴め羽を
 とらぬれぬ矢めとぞんじしと疑ひあらず東夷

め荒られし歌乃ことぞ知らばとつえども所
 もとところ折れぬ彼鳥を射留んゝと且つ以
 て候ふにつゝとく小腕とつひ未熟め其目
 的外まは鳥の羽を墓目れ止め候とぞ其間近き
 驗しあれと言葉よとぞ言ひ放つ多門太郎は
 ゆく怒るれめと道理あるよとせよ主人よ言
 ち成るんをめと今抛去し其弓を予に擲ふを
 しも同前其儘よとあらず寵愛はまつと道
 志とぬ嗚呼の者をぞとつゝと、並の人口よ
 誹りやせんさなる時とぞ家の瑕瑾切腹さるる

と奴もあまの前髪ゆれど小兒も同前、くふとまし
てを勘當ふふを其處越起よと顔色變へ、礫と白
眼たすひられぬ島之助も今更は何とゆえきん
言わぬあまの大小さし、れを悽寥と、其場をそのま
立ち廻りて、此日島之助が父字源太と御供
加りて、島之助を面目あやかりひりて、密に
たちりぬる、父は對面するこゝもあま、何地へ
起ち廻りて、人絶て行方を知るまを、○這と
後發端より八年程たちて後の譚あり、攝州中の
島の米商人は梶右衛門といふ者あり、歳老あり

手で一子ありて、まはれぬ、あるも、推舉して佐
吉と云者を養子とあり、其身を八十餘歳して死
ぬ、梶右衛門の妻は法躰して妙贊と法名し、家
佐吉は委任あはれ、寺詣めを所在として、更は浮
世に交らぬ、然るに彼佐吉は若くは似合ぬ律義
あり、性質よく、妙贊を實の母の如くは待て、家業
大事と心懸、物觀遊山よきへ出で、まをし、つら
み氣鬱の病を引つごし、漸々顔色衰へられぬ、
替間との世に、つひに口軽き可笑男、まは町風
粧たる藝子の屬を喚寄て、佐吉が伽とありける

浮世草子

一が薬と申し利めよく少し心も浮立やうに見
 えたるりり頃々如キカラギナカバ月中旬ノ野山の氣色も春
 めきりりり櫻も稍咲初々れをめりり折ツラクは鬱々
 と引籠り居るとれを愈イヨク病重るる何國ノも何
 れ起ち出て氣をささるる母妙
 贊の勸めよまのせさりり大和巡り旅立舊
 き名所をも尋ねるやとて店ミセめことり甲オモテ幹テ許ク
 おき跟者ウヅリ志やしく召連メをさくは起行りる○
 まるまると南都南圓堂の側をさるる二年のころ十
 七八とおぢりハスき女メ四歳許の女子を連ツ芝原シバハラ

出茶屋を構え彼處女を琴を彈ウタ女の兒を往ユキ來キの
 人よ扇をさしつけ錢を乞ふ者あり容色キリシタの勝を
 たる上は琴の凡音氣高くうめ唄ふ聲も幽シホラシ艶ニけ
 せば話し傳へ聞傳へ集ひ寄る者少ふりり中ナカの島
 世は男女の縁ユキあど何やしむるあり中ナカの島
 の佐吉をこの程奈良よ來る芝辻街と云ふ處に
 逗留して居たりしがふと琴をさる娘を見染め
 人を以て訊ねさせられこの女を其名を操ウラ
 といひて非人袖乞の屬ウラなり元モト來浪人の娘と
 是ど妙の身貧を貢んとて其妙の女子メカシ小芳コトヨシと云

を連て斯くおさまるゝき活計ウツタリをなさるありと其
 行状の正しき様まきくよましく思ひイヤマシ弥増イヤマシのひて
 聞およびたる名所古跡をみ見巡らぬ日毎の
 茶店よ来玉心をつけく物あが與え者ナシケをわつら
 とあ手ヒカく言交し操も佐吉が美男ミヲとして、さるも情あり
 きは悪めコエカの思ひあふ、身の賤したを觀視て
 云ひ出ん使ユスガもあく、互ひよ心よめと物思モノシはせく
 日々を過しる至、○流石よ永た春の日もを入
 相の鐘の音、櫻も人もちるくくはうり寂莫ヒツリあが
 まはど、やあく大きよ退屈したと、茶屋が床机を

起ちつぐるゝ、これら浪華の島の内、徳若屋の才
 藏とて、人よ知らせしおき屋の亭主、水掉サホをさる
 へ立倚タチヨりて、さぞお待遠でぶさうりまきや、人あく
 這所コトつと人あは木蔭才藏を小音コネよあ入りきり
 ちよつと話しを通玉、さあさるつよく百兩で得
 心して勤ウツクるゝたもるゝ、諾ウケその金ぶ姉さんイモの姑
 御の大病をおり、やあや療治ウツクグさせたさ、さる
 私ワタシグ得心でさるゝしグ躬ミミを賣るゝ、孰ナニグ何と申
 しませ、入とるつえ義理のちる兄さん、ちるゝ知
 せ、貴所アナタの方へ参る迄、まが沙汰あ、夫を

ゆへ書てあつひ申したこの照文へ、兄きんの
 判を密と竊と出して、こころが押ておきまうた
 見まれば寸藏感じ入る、どうも昨日余又證
 文を書てくまとの囁み又とあるまい孝行娘子
 その積りでは是うく、大事にゆけて勤て給、明日
 の朝禺中頃、復輿吊らせ、迎ひよゆき其照文
 と金と引き換へ、こころ都合を宜うらゆめ、有
 がこころがさうせん、目くいの視えぬ母きんへ
 お屋敷へ御奉公と上るとつゝおきまうた、
 それも承知、徹口上で士の迎ひよ来たとき、うせ

ままやう、慟わうでござんまうと、候の面を横
 と揺る、心を不便と想ひあがく、侍と笑ひよま
 らして、おきまうた、悄悄とあつひ、候次第
 で玉の輿乗物でよびやう、嘍々つゝ出るの
 と當前、さうあつひ、阿主きん、お娘明日と寸造ら
 劇し、おきまうた、別れ、○粵、南都般若坂、轎夫
 の戸平とつゝ者、先年關東と下、數村貞太
 夫とつゝ、武士と足輕奉公して居たりしが、貞太
 夫が妻初瀬が妹、花世とつゝと密通して、花世
 胎の身とあましう、詮方なくや思ひきん、花世

と連日々々出奔ありし故郷ありしがこの處に逃上り
程あり女子出生して、これを小芳と名づけ今年
四歳に成りたる。○この戸平は朽葉といふ
一人の老母あり、風眼といふ病にて一年許り
煩ひ、終に盲目とありしが、夫婦が嗟大方あり
此斯る所より又珍事として出来たり、関東に在りけ
る戸平が主人數村貞太夫、故より浪々の身と
あり、これをとりて活計もあきて一人の女操と
いふとき、育ひて見えられ、妻の初瀬が計
ひりて、其方より右之左之の習氣をよと妹の

花世が許へ娘操を送りたるを、貞太夫より
深く蓋し、こゝに潜を任むよしを、密に妹の許へ
去りて時々消息をとと交し、まゝ妹の心を休め
んとめ、身貧の任居を知らせ、世を安く送
るやうにめ、言ひ遣し故あり、彼花世と操
を姨姪の中ありと懂う三四の違ひあり、表面を
妹と呼び、まゝ戸平がたり、現在主人の處女
あり、取りけ大切と撫恤つゝ、日毎木辻へ通ふ街
轎を昇、身を粉と粹ひ、拵ども、元來蓄へある上
に、去年より母の大病あり、づゝ家業も怠る

家内の器具も沽竭し、其日とさへ送るかぬる哉
 操々視るに堪うのく、母とさうあり夫婦の者も
 も、南圓堂へ百日の間日参あり、百巻づつ、の普門
 品を誦むる大願を齋たりと詐す、稚ふれと彼
 小由ハ利護あり性質ゆへ、妙をよと緊く封口し
 て、もろともは彼所へ往た、袖乞ありたる鳥目と
 金と換え、國許より来る貢の金とつひあり、妙の
 花世と與へるを、翌日か三月三日よて、桃の節供
 のことありを、小芳を夙く起出て、一ニッ活す、めと
 きし雛を母の鏡臺の上と排せ、餘念あり、遊び

狂ふや、犬張子、喙の缺たる陶子と桃を手折て挿
 あふ、斯る貧しき住居よと、つう花咲の爺婆の
 赤本開て方言まど、雛と會解してきり、子供
 と罪とあつるを、戸平と今日も毎時の如く、母
 のまきかんを伺ひ、く、駕籠うち擔ぎ出往るを、操
 を妙よとち向ひ、とさん、の御舊封とおたち飯を
 何とばして、昔の御身とおありありと、又二ッは
 朽葉さゆ、眼病平愈祈るため、南圓堂へ日毎の
 参詣、時ありぬ寒さゆへ、久、今日をくしを氣合
 が悪い、と、おまへ名代とお参りあされて下

さんせと憑むは花世らうち點頭、そんなあうらうら
 しぐわのあやどいよ、母さんのお眼が覺たう、その
 お薬を上れたも、重衣アツキをして大事よかけ煩あう
 たもんあや、こそ小芳長オサキあしてゐるはしませうぞ、
 其代りよらよいお土産、買て戻う、代待て居やと、
 こそもとらうを出て行、折め、来め、徳若屋才
 造がさ、覗き首尾をよいうと目で言へむ、此處へ
 と腮ヒキて答ふる操、あらと承知と才造が、勿体モウタイらし
 く矜セキ咳ハレミ誰タリらう案内たのむ、誰何タレナレと操がよもく
 しく手をわうく、まど可笑オカシ堪え、拙者ら鹽谷判官

が家来徳若才造とりのあを者、今日いよく水棹ど
 のお目見よ上られ、然るど、候よし、お局長、岩
 藤イワフジどの、指揮よし、迎ひの竹篾ヨツデ、イヤあむさん
 鉄打テツウチ轆ワタめ、ゆりかき、赫ヒキ々輝く哉、さうくめ、いと
 さう鼻ハナをく、さう推察せう、急ひく、準備らう、ま
 よと、口うら出次第間よ合と、實と思ひ母朽葉枕
 屏風を排除オシクく、さうあう、おま、さう、御奉公
 の奉謁オウゲツよ今や、おつ、遊ばう、ま、久諾、姉さん
 や戸平どのを、さう承知の事、あ、おま、の
 病氣の其中へ、心あうと思ふ、さう、さう、延て

おきほした、とて理もあいことおつ志やますは
 戸平とりし身をわたり、嫁とりしを勿体あけまど
 花世どののちをわどと、孝行よしして下さますはま
 何おも不自由をござりませぬ、申さ迄をあらはれど
 も、取りつけ貴娘を大事の御身かみりし處も忽々
 とおき申さめりし心配、一日あうとも早い方ぐ此
 婆ら還て安堵ゆゆく、貴方は苦勞さむよぞんじ
 すれば、判官さむめのお屋敷らどの邊ぞござりま
 すと、問うまゝく寸藏老實よあま。○上郎を扇が谷
 南無三々を鎌倉だ、伯州でも遠過る、マ、そまゝく、

この程奥方妍娘々、病氣よよつ々御保養が々々
 八幡邊よは逗留彼山崎の津口を左へと、判官
 さむめは、邸を幾處々々とお諮りゆくと、早速
 相知を申さむしと、取捨くろえどあはれを寄、私
 も彼邊へまつらた、も有たまど、見も聞もせ
 ぬものお邸、つら項造営あり、はまし、たとき、さして
 とつと思ひあが、イヤ昔もく、大むうし、弥勤十年
 辰の歳諸神の建たる御屋敷、お廣い、とて出ぎを
 ままや、入むら、いもく、お屋敷あんを、見ても
 是、綾の縁が五百疊、錦の縁が五百疊、高麗縁が

五百疊千五百疊のたぐいと、さうしてやうと敷を
 ちをど、己をぐ名うと案じつゝ、さうして成忌と舞
 ひ出せ、蔵操を見らるゝ所、くくと風が觸れを
 身の毒、ア、く此方へと朽葉の手を兼り、臥房に倡
 ひらゝと、と枕屏風を引廻し、とを着る物を着
 換へ、口よりつゝえど、あは袖の、態も飾らぬ亂
 髪づいゝとく、と搔揚る、ま造を纏帯より百兩の
 金取て出せど、操を心得證文と引替へ、件の金手
 と兼り、あう、と四邊を視廻し、うゝと認め置たりけ
 ん遺書もろゝと、側らある、離れ並ぶ犬張子の中

と隠して、然るに大事の養生のをせと、うゝ聲き
 うゝ母朽葉、まゝとや聞て、捜り出、モ、出、を
 しま、け、り、定めし今日を總模様立派にお穿換
 と、此を處をたつたひと目視たり、此と、うゝと甲
 斐あり、この盲目、ど捜り、と、あ、と見ま、と、うゝと
 俣、操を愕き、せ、ら、あ、以、時の神あり、で、佛の前
 め、つ、た、打敷、古模容の綸子の黒地、を幸ひと
 佛檀より潜し外して、膝に排當、さ、う、と、さ、う、と、莞
 爾顔、うゝと、さ、う、と、を、數村、さ、う、の、令、娘、子、隨、分、の、首
 尾、あ、き、れ、ま、し、て、暑、さ、寒、さ、ら、う、の、うゝ、と、及、む、ん、食、物

二氣を注て、お煩の發ぬやうに、大事にお勤めな
 されませと、賣らせむ往とら白髪シラガの母、歡ヨロコぶ折ら
 ら納戸より起出タチる小芳をぐらんせあふ、ヲヤク可
 笑ふ蔽膝フクレしてと、言ひかくる代操が打けし、アこ
 を姉が美ウツク麗衣イを着て、うやまを思やらんが、
 刺下ツク其方ソナタも成長オホキタあると、ううう方へ引取て、喃
 んし朽葉クハさむ、ヲ、そそく、小女郎コジョウとやう離僧リソウと
 やうにお使ひよきせむ下きませと、何とふ
 く言ふことなむ、疵キズ有脛モツス一四邊ときよらく、合點
 田ウツカリ糸ヲを恍惚ウツカリと、小由コユを二人が面うちまもる、物

もえつと居たまは、才造サイゾウを打嗽ウツソウ遅引オシヒキを第ダイの
 手前テマエ拙者シツシャ何とも迷惑メイワクとて、去来キョライありしと儼格ゲンカク
 らしく、勸めむとて、涙を隠し、暇乞ヒマグシさく、そそく、
 操ササを表へ起出タチて、小手コテ招して、小芳コヨシを呼ひ出し、母
 さん父トコさんが、今イマあも戻らんした、私シを尋糸ムネイト
 あんした、毎晩おしえ、おつと通毛トウモ、花咲翁ハナサキウの
 この赤本アカホン、この處トコロを毎時イッサイのやうに會解エトキして聞
 せむと此身コノミが往た處ウチが知れ、必カナラを忘れ、給タマふ
 やし、餘波ヨロバ惜オシぎ、視ミく、む、小聲コナゲ、あつと家長オヤカタ
 さんお待遠マタむ、ごさま志シやう、イヤ幾待ヒコとて、

浮世形六枚屋

十四

言慣ぬ、儼語、困り果た、甘急、ゆるやかに
 操を復し、打乗せ、足を早ゆ、飯を食、右も
 知らぬ、主の戸平、劇し、起ち歸る、左右視廻し
 上を口、忘し、煙管手、採り上げ、南無三、路で落
 したと、戻て、それを矢張、終是、あんな、ゆる
 う草、烟草の、おげ、間費し、夫をさき、と母人
 幾、目、覺ました、ため、覺た、か、い、め、た、た
 今、塩谷、さ、む、め、お、や、き、く、迎、ひ、が、来、く、操、さ、む
 ら、筮仕、の、奉、謁、上、る、と、つ、ま、く、装、飾、も、人、手、を、お
 し、お、獨、で、其、處、で、お、召、換、鉞、打、の、乗、物、を、往、は、た、ふ、

ア、こ、あ、く、路、傍、逢、を、さ、や、ら、ぬ、と、ゆ、ふ、戸、平
 を、不、審、を、れ、を、然、ゆ、ふ、こ、と、が、あ、れ、を、何、程、お、役
 又、た、く、縁、を、と、く、一、通、を、私、と、相、談、も、あ、る、答
 の、と、ゆ、ふ、理、と、劇、く、問、へ、を、朽、葉、を、打、笑、ひ、
 此、方、衆、夫、婦、を、め、く、承、知、の、事、と、貴、娘、の、お、言
 葉、よ、も、や、虚、言、を、お、つ、と、や、る、ま、い、を、れ、を、忘、し、
 々、た、く、ま、し、い、否、々、々、此、戸、平、を、真、以、て、存、知、ま、せ、ぬ、
 フ、今、途、を、見、た、輕、篋、お、身、を、逢、ふ、と、垂、を、下、し、
 中、平、を、懸、ま、る、形、勢、何、よ、し、も、合、點、が、往、ぬ、蹤、
 追、蒐、と、驅、出、去、向、ふ、廻、つ、く、女、の、小、芳、を、お、父、

金が出ると、今の理解を犬張子が、轉べが金が発
 るとの謎々、中に入たるこの一通、何と両方へ申
 置、操と何より合點往々と、封おし切を母より申
 何志や、操さむの文章が、ある、と、いり、事さや
 讀み聞しやと、耳時を、とら、驚きあふ
 笑し紛らしお氣配いあきれ、呉とも、は國
 許の所生の事、案じらる、おま、さむの尊意が
 お快よりあつた、と、鑊倉へ私に下る、安否を聞
 て、く、お氣さき、適あ、と、宅へを戻らまい、
 直に第一、おち着、と、宿下、と、逢、と、は、ね、と、

夫婦の者へ遺書、イヤ、と、し、母さや、人、風、が、と、や、く
 觸ても、お氣分、と、さ、と、ま、と、あ、と、一、下、寐、と、を、あ
 されませと、臥房に連行障子を建き、思、と、は
 志、と、は、獨、と、言、と、操、と、は、情、け、過、と、恨、し、い、何、程
 阿娘が編笠、と、面、を、お、蔽、し、あ、と、は、毎、日、通、る
 南圓堂、袖、乞、を、あ、と、は、知、ら、つ、と、何、と、つ、と、し
 ませ、と、噫、嘻、身、貧、と、此、家、産、と、ら、み、と、下、さ、る、御、志
 とし、夫、と、は、成、む、と、と、つ、と、な、ま、い、と、今、日、ま、と、特
 と乾顔、陰、と、拜、ん、と、居、ま、し、た、と、れ、と、さ、く、何、と、と、
 勿、体、と、は、令、娘、々、の、軀、の、代、と、あ、ん、と、浮、世、が、と、と、

らまゝと云ふと、^{トツカ}童許と坐^るくもくぐ^る涙、何時の間
 ころを飯^をもく^ん門口^{カド}に勤止^をもき^る居る女房、^{カキヲキ}母
 ろんあ^ら操^を彼^ノ廓へ、^{アラマシ}形勢^を崖^ノ畧^の遺書^を母
 ちや人^に聞^えぬや、^ト讀^み見^せと^ト擲^出せざ、兼
 る手^おそし^とれし開^きあふく、一筆^申し^残し^參
 らせ候、只今^迄も夫^婦に深^く蓋^を、毎日^く小^由
 と連^観音^大士^へ詣^ると詐^を、袖^乞し^出國^許よ^を
 の貢^と申^し少^しを^おカ^らし^あを^候へ^ども、そ^も
 思^ふや^うに^果敢^とし^め、此^やう^に忽^々
 居^候て^もい^よく^貧苦^の御^身に^あを^候も^んう^と

それが哀しく、鳩^の内^の娼^樓へ百^兩に此^軀を賣
 る^參ら^を候、この金^{にて}思^ふや^うに、朽^葉さ^のの
 御^養生^あされ、何^もあ^らず^も少^しも早^く、^家業^に
 御^取附[、]若^も餘^りの金^子の^り候^も、^鎌倉^へ
 出^下し^下さ^る候、^{これ}も^率の^浪人^の事^に候^へ
 ざ^とを^御不^自由^がち^と察^し參^らを^候、何^もく^取
 急^ぎ大^畧恐^惶と、讀^み下^せざ、戸^平を^聽に^堪へ^兼
 て^件の^金を^把搦[、]葱^出を^裳裾^を花^世を^曳止[、]信^相
 變^つて^も何^處へ^往ま^やん^ま、^とく^知る^事
 この金^返して^操も^成、^一且^證文^濟を^上ぐ

ら、本金をさくく措く、一倍増てもさくくさぬ制度、私
 ども現在姪のこと、勤めさくくするも本意があらわれ
 ど、斯あるさくくを為方がない、さくく此文に書くお
 けと通す、此金を本錢とし身を粉と碎く身の上
 仕上け、國許の姉さん御夫婦おみつき申して其
 内又身請さる他をあいと、さくく言ひ宥め、母
 をさくくあう、鎌くくくも、武家奉公と云ひ下し、夫
 婦のさくく心を用ひ、金よけのして養生あしする
 さくくおどあく母の眼病平愈あしこれさくく
 から得る少し導めたりくさを、攝州浪華へ引

移りくるさくく、斯く水棹を島の内の藝子とあそ
 ぶの名を小松と更めし、容色好き其上は例發
 する性質あまらさくく、全盛あさくく方もあく、平常
 兩個の櫛を押し並ぶく挿しするさくく、浪花の人
 彼を軍号して、兩櫛の小松さくく、喚做しするさくく
 米商人佐吉を、操り行方志を、あまられど、詮方
 なくこれ難波へ立歸る病氣保養の其ためと
 する時、さくく其所、這處さくくのさくく歩行、月雪花の三
 紋をつけするさくく、誰のさくく、渠をも縛りし
 三花章の佐吉と呼び、同じ浪花に在るさくく、さ

まづが蕃華の土地ふれどいまぞ標より環り會ひ
 ざりしとあんな、○梅の難波の梅田橋、梅は實の
 つる五月雨霽る水無月朔日ら、勝鬘詣の庚子舟
 唯は繫つて立ち出るを情と戀の二櫛、小松と云
 ろく名を里の妓女、夕風颯と吹くは散し模容
 を花と視て蝶玉跡追ふ堤づつひよし其處へ往
 りちやんを花咲屋の阿花さんびらごさんせ
 ぬうと、喚びうけらるる棹を回し然いごちやん
 まる小松さん、おまんら何處へごさんした、唯少
 許した齋禱は、勝鬘の愛染さぬい、お参を申した

庚子路今おまんの内うとへ往るところごさんまとい
 ろよお花が打らうひ曳手数多と、つらるる小松と
 名を付らうと人さんといはるるおまん、愛染さぬへ
 参ると、餘り慾ごさんまごん、夫ら然と今とて
 曾祢崎へお客を送り歸るところ、此との行ちをひ
 逢まぬところごさんしたおまん、お船を、何
 故この戸平どの、然り下さんせぬ、皆さんを駕
 籠あまご、餘りふの海暑は、廻り路も舟ごゆふと
 ちんの俄の思ひ付たのよ、おとけ間も、話しか
 ぐら、花咲の内へ這入るを愛らるる、二階を娘が演習

来玉、珍らしい左吉き由、きんき里お足の向ぬめら、南
 の方又面白否々、こゝろも知く居る通、何處へ往くも
 相方を定ぬが、おれの生質、志の餘を、あまびきかた、何
 程氣の善、母志や人も、少しゆきれれば、きんきや、彼左
 吉と、つゝ奴を、轉寐も、筆盤を、枕とし、帳合の、寐言を
 つつた、あまき、若者より、珍らしい、商好の、遊びぎ、ひ好、事
 さら、二ツ、あまき、醫師も、手を、措ぶ、疾命、換らぬと、
 おき、あまき、めく、頑戯、たの癖、あまき、近年、家の、更、
 と省、あまき、ぬ、ゆ、し、入、事、を、身代、を、ら、げ、し、始、の花、章、三、
 紋、と、ゆ、名、を、と、る、を、平常、内、へ、來、居、あ、ま、き、竹、齋、や、淺

善が異見を為ぬが、恨し、つゝ、あつ、志、や、つ、た、と、管、家、の、誼、
 と、を、故、恰、百、日、む、の、里、肩、口、へ、も、出、あ、ん、だ、と、云、ら、ち、二、人、
 の、牽、頭、と、も、を、を、や、こ、そ、可、笑、ふ、日、和、と、あ、つ、た、南、無、三、く、
 と、づ、く、と、耳、を、ふ、き、け、お、あ、ま、ら、ち、笑、い、この、雲、行、
 と、を、實、よ、今、夜、を、あ、ま、き、も、知、ぬ、め、の、よ、吉、利、の、こ、ろ、ひ、と、
 云、あ、ま、き、さ、び、盃、を、竹、齋、が、手、よ、と、を、ゆ、あ、ま、き、四、邊、を、見、ま、
 と、し、床、の、間、よ、三、社、の、託、が、掛、る、の、を、ま、き、と、ん、た、が、を、
 の、前、よ、犬、張、子、よ、七、種、菓、子、が、上、り、ゆ、る、撫、牛、が、右、の、ゆ、る、
 あ、ま、き、犬、と、を、新、し、つ、と、つ、ら、ぬ、と、戸、平、が、目、語、し、を、ま、き、内、
 の、荆、妻、が、セ、め、を、た、と、ま、代、し、ま、し、て、あ、ま、お、花、ゆ、ゆ、と、ま、ま、き、大

浮世形之秘屏風

と、定めぬおもしろ人の遊戯もてたあが藝子らうを物
 買物金さへ出せば自由もあふ、そは浅真實のあふやう
 と思ふくあふら大駈子と、人ぶといふがめどろあけ、二
 階を下まくる二、櫛小松とゆつと面視合せ、あふあが送
 る後影見惚く左吉ら手は持し酒ぶらわきく吾膝も濡
 の端とはあふのもあふに、今の歌僮も渠誰ドや、懐かい
 ま竹齋さふの噂をつた、二、ぐの小松さんぐでぎを
 まはと、さあく左吉ら茫然と、盃あけさく帯も直し、さ
 今この彼をあふく、遊がえやうと心も空も變りく降く
 る白雨もあふくあつと沈々と、あふけもあふく、最究

竟者共ぬあふあやきあひこと、そを立たる二人を打
 つと、戸平を供し小松を慕ひ、島の内まで到る。○座
 敷もまんを床の内、小松を背脊ゆ向く、あふをい言
 けを野夫らく、言ひ出してぬきあせると、心もあふあ
 知らひあふも大和巡り代為たられ、南圓堂がそあふの
 凡音毎日々々、さうとねく、節もあふとあふ内、何地
 へあふと行方を志す、身を賣たあ人のうを、眼
 と鼻の間あふ、この島の内も居るとあふ、大抵搜
 したあふらあふ、併し今日巡りあふたら盡ぬ縁とあふ

一人合點カチンたるものも白癡アハクあまど、てきあう折オリり来コやう
 ちどチと否イヤらうらうと附合ツキアフる、ちをせうくたれやいのと、
 座落離ザラリと小判シバと十圓ジュエンをのぞ紙ヒを拵ヒナツきし出し皆ミナの者
 によゆゆう、又纏頭マキアタ又とらせく餘ヒヨクるがらうバ浴衣ユカクをも
 買カう着キやと、いごと小松を見向ミマツせむ煙管キセルあまへ額ヒタ
 又ゆく俯ウツく面オモをさし覗ノゾき宵ヨイあまの雷鳴カミナリを氣色キシヨクがまる
 くら薬ヤクもたる、あぜりのを言イやらぬと拿トルる手をまげふ
 くふをさうひ、氣キちひもさうふいどさんせぬが何處ドコへ
 往イッるも對手アヒタを定ぬがわんのちをびたうが妓婦ゲイブらうを
 物買モノカりの真情マコトがたるとおれらう居イるを癡夫アハクと悟サツた人

さんよん、さういふくよんりのやう、此小松を知りやん
 せぬと直敢言スガカクへがあを畏スリコシお身ミが先刺舟宿サツキを、いつたる
 を二階ニカイぐさう、そのやうは物振モノフリのあ、まて、相方を定めぬ
 も、其方ソノカタの往方ウチカタを尋ヒるらう、這方コソナをや、標サシといふ、處女
 とおれらう居イるらう、の、さんあうい五文三文袖乞ゴよ、相
 應オウふ手の内ウチを下さんせぬ、金カネさへ出デせを自由ジユウとあうし、
 見下ミダらるるが腹ハが立ツ否イヤとやゆらうが附キらうの折節オリノヒ
 ら来コやうのと、深シ深シ切キふお志シし、おれらう、うらうの事コトお
 らが、ごさんせぬが逢アうまう、さんおあまの氷ヒ真マひ
 心ココロと知らばう、いしく愛アイ染ゼンさるへお百度ヒャクう、くまや

強顔^{ツラク}のくも左吉^{サキ}がためし、奥の一室^{ヒトマ}に地^チへ込^コみ、
 我身^{ガミ}の側^{ソバ}を放^ナさし、戀^{コヒ}しくと百^{ヒャク}をあらう、妙^{ミョウ}のこ小松^{コノマツ}が
 わく文章^{ブツ}、竹齋^{タケサエ}が手段^{シケン}、目^メはつけが、花瓶^{ケイビン}は、地^チ
 し込^コさき、地^チをむ、何^{ナニ}心^{ココロ}あく左吉^{サキ}を手^テはと、夫^ウと見る
 心を嬉^{ウレシ}しく、四邊^{アタリ}見廻^{ミマワリ}し、漸^{シヅカ}々と半^ナ分^{ブン}をあらを讀^{ヨミ}とと
 りへ、起出^{チデ}る母^{ハハ}妙^{ミョウ}賛^{サン}灸^ウを、やうと地^チのふたを、地^チをよ
 らど、うもよめあやめ、日^ヒが好^{ヨク}く見^ミる、差^サがを曆^{リキ}の
 中段^{チュウカン}も開^{ヒラ}く、や見^ミらる、危^{ヤブ}む納^{オキ}むふところ
 へ、あきらめ、せど氣^キらど、今日^{コンニチ}を天^{テン}一天^{イツテン}上^{ジョウ}ゆけ、地^チ
 部屋^ヘへど、些^{チカ}の間^{ノマ}、あつとる日^ヒはあ、地^チをぬと、此^{コノ}方^{カタ}

のくめんが、十^{ジュウ}方^{ハツ}暮^ク己^ニは成^ナる金^{カネ}あつ、四^シ五^ゴ百^{ヒャク}兩^{リウ}手^テよとる
 渠^キ奴^ヌめが女房^{メカド}よあ、平^{ヘイ}らな此^{コノ}内^{ウチ}が、あまらふ
 のよそ、下^{シタ}さし、血^チ忌^{イミ}をも、幼^コよんあ心^{ココロ}よあ
 左^サ言^{コト}始^{ハジ}め、何^{ナニ}を云^{イハ}ふ、母^{ハハ}ら、遊^{アソ}戯^ビを、
 左^サ言^{コト}始^{ハジ}め、何^{ナニ}を云^{イハ}ふ、母^{ハハ}ら、遊^{アソ}戯^ビを、
 内^{ウチ}の令^{レイ}グま、辛^シ抱^ダしく、何^{ナニ}處^{トコロ}ぞ人^{ヒト}の氣^キ
 の付^ツぬ、遠^{トウ}い所^{トコロ}を、月^{ツキ}の内^{ウチ}よ、二^ニ度^ドや三^{サン}度^ドの、
 為^タたの、小^コ兒^ゴよ、甘^{カン}いお、喰^クせ、
 為^タたの、小^コ兒^ゴよ、甘^{カン}いお、喰^クせ、

やうぬ前あつた止やうもゆらふをど、神子どのど
 ぎんを断つふも歸まを、その身獨り聞入る
 事むのう話してたも妾の聲のまゝぬ所ぶお称名を
 申し居やうと、足下く起る奥深き佛室へこそ入る
 跡見おくつ左吉のまを侍おも能來きたり
 たのちん、おまが内へ來るあつた、口寄はあつて來いそ
 うせぬ逢をぬ、竹齋まぬのお言づく、急にお話し申
 さぬ、あつたやうにあつた災難、夫故斯いた姿はあつ
 有似らまう言ふ内は、びりまを、汗はあをまいたお
 まうゆらふも、おのやうは己が傍は、番をくお出

あつた、此とした吐も出來ぬ、こころ此方のお袋
 の、雷公巫女は、胡亂の醜業、此三種が大のおまゝひ、夫の
 らの思ひ付を、神子まをといふた、案の茶、お部屋へ逃
 るお看經、うら泣くも笑くも、もうまを、つるまを
 あつた、まきあつた先刺と、あつた小松の文も、意外ある
 が、まきあつた早く逢た、いと、話のやうは書きた斗ぶお
 んの事をやの譯が、おまを、問はまを、お花の目は涙今
 迄の貴郎は、お蔵し申した、おまを、況や他人の
 まき前、お小松さんくと、餘所く、いと、おまを、實
 いら、お姉の子まを、いと、おまを、現在伯母姪姪

塔の鑊倉より、某の御鷹のついで、秘蔵のその鷹
 と、そつた越度御暇夫より、前より私の花世
 とつたつた内をほろつ侍と、嬉奔して、大
 和の國まで逃上り、夫婦とあつたが、戸平どの、内證の
 姉さんと、あつた文のとき交し、その内は、退糧あ
 せ、こゝに聞きの悲し、姉さん七途方より、わんの
 親を哭寄と、あつた妻を便して、其地を行義とら
 けたうへ、御奉公をせむと、彼小まつが水掉と、
 十四の春は、大和まぐ人を附け上り、と、戸平どの
 が、轎押より、母子が憂命、つと、あつた身貧の住

居雑加、姑御の、目々の見えぬ長の病氣の娘も見
 る、忍のめ、私の娘の小由を連せ、南圓堂を浅ま、い
 袖乞、吳まりた、泣出さ、左吉の愕き、夫あつた操
 と一所、袖乞、出た稚女娘、頃日、義太夫三絃の、替古
 と、まゐりのお由、さうつ、其時、た、小由と云
 た、おつた些の間、大さうあつ、予、頓と見忘
 た夫をよ、その意外、あつ、い、のが、早ふき、た
 び、昔の、の、立を、い、の、形勢、が、知ま、せぬ、夫
 う、操が、袖乞、も、果、う、貫、ひ、も、あ、と思、う、と、私
 等夫婦、相談、せ、留守の内、この島の内、徳若屋と

つふ、ゆゑやへ百兩を賣た遺書とその黄金が小由
 離の犬張子に中へ出る内ハ騒動ふんや母の病氣
 志やとく、女房の姪あり主人あり、其方又勤をさせく
 ら男がたぬと戸平どのの半狂人^{シキチガイ}はあつたを、
 一あやうくつひ宥め、夫婦連立、徳若屋へ來るんを
 彼方^{アツチ}で却て面目あつた、叔母さ由免しく下さるませ、
 國の父さん母さん、浪人であらう、貢納をせ
 ぬとら、其悲しは譯も言ふべ、私^{ワシ}が身を沈め、た叔
 母の親の片もあつた、ゆゑもあつたの事をやると國は
 ござる母さあつた、孝行のと思ひまはし、聲を揚て泣た

面今^{オモ}は忘生い、つゝませぬその眞實は感ト入る、戸平
 どのも得心し、金よりして療治したる、姑母の目も
 愈^{ナホ}すのつた金を今の住居梅田橋へ引越、山あつた河
 の舟宿商賣大あつた、小るを、元とつて、彼
 子のお蔭^{カゲ}平常^{ツチノヘ}は覽る、通^ツる、犬張子と大事とさる
 ち、小松が思を、それぬため、姑母^{ハカシカタキ}昔老實、ゆゑの故郷
 を離れぬと、大和とござるが氣、ゆゑ、無理と浪華
 へ呼ぶと、今迄は屋敷、御奉公とつて、あつた、
 の子の勤め、知らず、却てお氣が、ゆゑ、隔^{ヘリ}
 る居る、ゆゑ、あつた、國へ、猶更秘し、と、今度

小松ぶとくとさん、私ぶ為の姉婿が、殿さるへやいふへさ
 きて往時の武士は立歸り許字とやうがらむが、操を此方
 が縁付る奉公さんの暇をとつて、鎌倉へつて飯を食と、五
 の年まごらの子の側へ附り居た乳母の子、雪室柳助と
 つみ男、今らととと見違ふ立派な武士が迎ひよ上り、
 安治川に宿とつて、操さるのあつとめさる、左邸宅へ
 案内して逢せとくまると日毎の催促耻をせとく、今の身
 をつみの手間隙つとつとどもさうしと彼地が金と
 のく身請させとつて戸平どのあつとく國へ面向あつと
 小松のつととととを操を國へ歸り久しぶらふ父さん

や母さんの、お面を見たりいあるけれど、左吉さんと縁
 切つ、他へ嫁さるるあつと、や死まん泣き居る、此方
 が身受いたふとい、金椰移の的いる、譬へ金がつとの
 ろと心、武士同志の結号へ、反古といあつとねとやうう騒
 動、大和は居た時分とい、私に貴郎を志すねと心、お世話
 又多つとと彼女が咄し、今とと寝らむ目をわけ、下さ
 るまは、お憚りあつと、聾のやうと存じ、身代の店お
 ろし、今宵のさねといは、馴染の歌川屋へつとりの客が、小
 松へ出る居まされば、ま渠は逢つとのうへ、相談あつと
 と下さるお世と、あつとく聲とく語らる、左吉のまねと

氣も漫ろさういふるが捨るの措きぬ工、まゝと母者
 人又又明且叱らるる分のこと、そんな往ふがま待よ
 歌川屋は四五兩債がゆをば揚をるまん否々さきも
 どうらうさふま、まゝの方の先へ飯をやら、もう日暮まき
 此とも早く母合敷ちやと、此花を戻し簞笥の
 着更曳出し、帯引をむる一室より、母妙賛の起出、神子
 どのいあんと言、まゝと話し、まゝと問、まゝと愕乎、と
 いそまは、は何もさやうは狼狽こといあん、母を聞か
 らも知る居る、大方其方の煩、小松といふ崇者、色と酒
 のの、雙股竹、相の枕の睦言、昔の女身も弓取の大夏ふ

軀を忘る果、今市人の身の上、い、め、の、あ、み、ぐ、大、切
 ぶ、金、銀、を、放、撒、二、名、が、浮、名、の、小、柴、垣、結、た、ら、ま、ら、庭
 だ、あ、の、の、令、ぐ、き、あ、ぬ、と、此、母、が、扇、の、陰、や、陽、と、あ、り、異、見
 を、し、て、心、兎、又、角、又、圓、緒、桶、又、方、蓋、合、い、難、る、と、ま、ま、
 い、さ、だ、ち、の、内、の、遊、伴、も、茨、目、を、つ、く、思、ひ、し、て、意、氣
 地、と、や、う、を、立、烏、帽、子、揺、き、ま、は、め、つ、る、木、の、葉、の、露、吾、が
 身、ま、め、る、災、難、が、い、つ、と、出、來、た、そ、の、時、の、車、の、海、へ
 船、の、山、逆、さ、ぬ、と、い、つ、も、見、や、う、あ、い、ま、ま、い、つ、も、氣、は
 め、る、百、萬、年、の、生、口、ま、め、ぐ、身、代、大、事、と、ま、や、と、い、つ、
 そ、つ、と、袂、よ、を、投、出、し、た、る、百、兩、裏、左、吉、の、夢、見、し、ど、と、く

ろく、お、戴々を面々むけ、巫女へ初穂の百一升、今夜々
 免し、やるむら、且の朝々見世の者の目の寤ぬ内歸
 ろろぞ、かう是限おや、跡移り、して母を知てませぬ
 と、接穂心雨露の恵こもく、同じ色香も咲もふの小梅を
 他は散まると、おや木の思ぞ深うをりる。○戀草の種植
 そや、堂の島花あな里を花よまる、橋の名さくも梅櫻、
 松ハ緑の曾祢ざんえ、つづくよびや、とむく三絃も、氣ハ
 二上、その三下、心せらるる、三絃左吉、おとあぶ許、つも
 音信を、母より貫た百兩の金、腰へ移り込、歌川屋の裏
 河岸を、往つ戻つ見上、奥の二階、とんちり、と、物案

じ氣よ小松が姿、幸四邊、人々あり、爰まで来た、代々
 せの手拍子、戀ひ床、い男の面夜目、も夫と視くと
 つ、早ふくの手招き、氣ハ飛立、と翼ハあ、詮方、あ
 この内、あれ、見つけ、ら、た、や、まる、分、と戀、ハ、間
 の黑板、塀、擡、放、を音、き、つけ、劇、ハ、鳴、出、を、犬、の、聲、啣、付
 たり、吠、あ、と、を、雨、落、の、石、手、當、り、を、い、桐、を、投、る、其
 内、懐、上、を、百、兩、包、を、ろ、も、と、お、ら、る、氣、も、付、を、石、と、諸
 共、打、つ、ら、を、遥、ろ、外、川、岸、を、繫、ぎ、と、や、る、屋、根、舟
 の、挑、燈、を、ら、た、り、打、消、よ、を、投、打、を、あ、る、誰、奴、や、じ
 や、と、寐、惚、聲、を、と、を、見、付、ら、と、あ、は、茶、々、二

階の上より見るゆゑのさ小松お松は打撃る志どきの
 帯の蔦紅葉やうくそきをカラ草高塀のを超へ吐息をつ
 き初めうろ斯かれはあんの骨のゆをぬのよ斯うふり
 ぬい盗人あも孟浪といあうをぬと二階へ開の小松の
 とり付口ゆらとる志やどきんをまい妾の半分死ぐ
 居る悉しいゆのゆをふさんよきあ志やん一た通りの
 仕義今更ゆへに引別を國へ戻つて嫁の志まあらう
 とゆゆんを寧殺し下さんせとつと泣出を口へ手
 を當り静あよゆたがよいゆまんふ予よ繫がゆ
 る國よどざる親たちよ歎き代ゆくるゆあんの悪縁免

してたもとつひにゆまがゆをやうく志ま居たる國の
 事言ひ出しゆま位せく下さんを打つ杖も床しい
 もの況てや拳もゆらゆらを可愛あうゆと父さん母さ
 ん、こまをうろの志らぬ迎ひよ來たる乳母の子あ
 顔恰好いゆゆゆと國の由縁の人あをば逢ふゆい山
 々あをを屋敷づとちをきるとゆふ其私あこの容は油
 氣あーの大嶋田輕薄な態を逢ゆもせ心内のあふ
 しくは度量してと伏沈む男の背中を撫擦を身受さん
 志くあゆふ又志やうもゆらゆらと百兩の金の貫あ
 持あゆふゆけも拂るゆ裏口あゆ忍びらん來たるゆ

のまこの金を地花に付與し、地を志名といふは、身の
 代の手附、よきと地を志名といふは、搜せどくどくを
 こもや、今犬は打た、磔重い石志名と思ふ、この地を
 九金と申す、たも志名を、こを手中、まてもらふん、
 地を志名、斯くもこを、まは、地を志名、下を志名、
 く、小松を志名、地を志名、地を志名、死、地を志名、
 ぬ、因縁づく、た、身受を志名、生、居、
 本國へ歸ら、ぬ、體、嫁を志名、夫、
 流石、妾も武士の娘、守をカ、持、居、こを志名、殺、
 流石、妾も武士の娘、守をカ、持、居、こを志名、殺、

くと、男、死、神、誘、こを志名、今更其
 方、別、地を志名、浮世、望、石、瓦、百兩
 と、不運、死、志名、今夜の客、
 郷、堂、頃、日、士、衆、揚、置、
 だ、ご、ん、せ、ぬ、こを志名、人、目、
 究、る、表、小、松、さん、御、客、さん、
 一、愕、き、体、戸、へ、左、吉、を、急、劇、
 素、知、ら、ぬ、面、口、は、花、唄、心、
 子、引、明、入、來、る、客、小、松、を、色、
 何、が、気

花咲屋の姪との噂も届ちて念の為客とあつて四五
 日以前表向のき一義幼面疑ふと蔵やきまき金と
 どのへ、只今親方徳若屋へ對談つる身の代償ひ、證
 文を受取たまは、今宵あつて自由の身細螺彈を雙
 六の相手つる、た此柳助を迎ひとらうと、慙も
 耻辱も打もて、御息災お面をせ、早速おせらそむ
 をもぐ夫を他人あんぞのやうな秘しつるし、お
 二人あつて、此お恨みも存じなれと、わろと泣く語を
 ける、小松の更あり側がま、お花も面目擲首し、操もつ
 とらばせとのも、元つとつら私ダ答、わろ何ととも

堪忍して、こを限つて下んま、今度國の出世も就ま
 下る、其身の幸あせと、彼子もお客のその中、適はぬ
 中の人ぶらゝ、怎生貴方の椰移、國へいよ、又ひや
 つて、その男と夫婦として、お二人、この浪花へ引くる
 かり、よいあるまい、あし、憑り、小松も泪も咽び、言、返ち
 ち、あつて、海も山も、辭へら、ぬ、御恩を受た、この
 身あせ、且暮、お床、この體も、此地、残る、お、
 魂魄も、母さんの懐へ、入る、居る、お、お、お、お、
 武士の娘とつ、あつて、薄お、人も知る、適はぬ、義理、
 かつ、わろ、浪波の土とあ、お、お、お、お、其方を頼、お

くわどふ操の氣合グくるひとも死たもいのふくや
 矢張くくくあわくたも國へのいや志やと掌を合せお
 づ口説バ柳助の涙を合む目と角たふ氏より育ちお
 耻ふいをも薄情ある身と深ま上の空ある世と習ひ
 親の事も故郷のことも忘るくわどふの心よいのつお
 成るふされも一たは兩方グ私を、お側へ召かおつ志や
 るよ、退糧しく居る内、髪をあらして樂々と法体志
 やうとおのふたきど操グ戻たその時、わくく果たを
 るるあふい、無やゆきお悲しからく、其や居たが今
 度の僥倖、早くつとく歸つたも、柳助さる憑みまんとは

家来まよふ手をばわく、どのきお付るも貴娘が可愛さ
 待憧まくござる所へ、妻々一人、故らま志やう、法國
 といきつきたした、結締もござる詐、いふたが顯
 する、親檀那の御切腹、あさるやうよあらうも知をぬ
 花世さるも同じやうよ、鎌倉へ下るのをお進りのあさ
 らる、此地が夫婦を為く、おをたふ、其者もごん、お
 る、堂島の米屋とやう、とち万兩の分限、お市人へ娘を
 遣、其婿の世話、あらくふと、召歸、さねく古主をあらうを
 て、此浪花へござるやうふ法、二方をと思召、あさく
 がこのやうよ、腹立、るのも操さる、お身の上、が大切

浮世形六枚屏風

三十八

へ、斯カサのふるといは存知あり、今日ケフり翌日アシふと日を
 筆ヒツへ指を切つて待マツてござる、母御ハハノミさゆのこのお文章フナシど
 らんあきねと篤ツツクとは思案オモイあきねと下さるやせと、さ
 出デまはれ小松コマツの手よと望ノゾみ表書ウラカキえをば、操マツルどの参る母より、
 此方ココ無事ムジヤとゆをかせし、お筆ヒツよ年のふつたこと、十四の
 年トシは大和オホヤマトへ来り、八年ハチネン拜オガまぬ親の面オモ見ミたうあう何ナニと
 志ココロやう、とふゆふと今宵イマヨもも、死病シニヒ受ウケたとき、母ハハさゆの
 懐イタくさる、臨終リンシウを仕損シトマひ、ゆのさる耻ハジメもさらさうあつと案
 じ過スぐのせむさう、親オヤのゆ志ココロをこと、餘ヨリを吐ツくたもん
 ると、文フミを抱タカシめくく消キ入ルるやう、歎ナガメまじふ、何ナニあり斯カサを

言コトひくらめ、二人ニヒトを返カエした上ウヘのゆと、思案オモイ定めく泪ナミダ
 を拭ヌグひ、おんよさう志ココロや父母オヤハハよ男オトコの替カらぬ、かうさう
 ちうと思オモひ切キ明日アシタハ國クニへ歸カエらうあう、今宵イマヨハ今迄イマドコ心
 易ヨクい人ヒトさん、緩ユル々と暇ヒマ乞ヒたりねを其方オノオノハ、今イマ戻マつ
 たも、つく、律義リツギの柳助ヤナギノタケノサトウハ、真マコトとゆひうち、悟ヨロコび、ゆ
 づの、さる、然シカドカハ明日アシタ目メ出デたゆ、駕カを吊ツラせ、御ミ
 迎ムカひ、ゆ、付ツケか、あ、あ、あ、何ナニあり仕拂シバヒひ、ゆ、
 土産ミナト金子ゴウジの御用ミヨウもござる、あ、あ、あ、必カナラま、あ、あ、遠慮エンリョする、
 花世ハナヨさゆ、あ、あ、種イコク々ハナお談ハナし申マウさる、あ、あ、あ、あ、宿ヤド
 まく、あ、あ、同ドウ道ミチと、打連ウチツ起ツる、あ、あ、あ、あ、何ナニあり言コトひ、あ、あ、あ、あ、

きんや障子の紙一重見へざるは是非もなれ袋戸
 開く吐息をつと小松左吉さんごきとつひつ手を取
 る最前をのびし松が枝をつとつと下る河岸づらひ
 二人の其處を走去るる○浄瑠璃節この世の名残世
 も餘波死し行く身を辭ふるは原の路の露一
 足づつと消るゆゑ夢の夢こそ哀なるれゆを算ふれを
 曉の七の鐘が六つづくのころ一ッが今生の鐘の響の聴
 ぬとぬ梅田橋の鶴澤が月次ごうひ浄るもも吾ら身よ
 似たる二人連堤の蔭を起出る左吉に向ふやうち視や
 るこれ小松愁とくくへ走つたり近くへ隠る追手の

者とやまきまごさうと思ふとまゝ案の糸歌川屋の挑灯
 が行違ひ花咲屋へきつ来り戸平も花のさきくを尋
 ねよ出たやうきるまゝ其留守の内へゆき心静らふ寂
 後を遂んと小松を志ぬを吾一人花咲屋をきり覗き
 由く夜が更たよまご寐があと言ふねくるんの頑是
 るく今宵の隣のお師匠さんの浄瑠璃をきわく居たれ
 ば小松さんが欠落をさ志やん一たをて迎ひお来り父
 さんお母さんも跡逐るごさん一たねを往たふも留
 守居があの後ひを志中ふり明且ごも逃さんきれは善
 ものと、言は左吉が點頭おきあつと居るやうに、聴た

くばきわくおちや、唯々夫る留守して下さんせし隣
 へゆ〜ゆ〜走り行、影視ゆ〜ゆ〜小松が手を拿り、奥の
 一室に密し入る聲、洩き〜と在りし屏風引廻せば、壁越
 し、洩き〜とゆる隣の、浄瑠璃「雲心るん水の面北斗の牙
 と影うつる、星の妹背の天の河、梅田のち〜と鶺鴒の橋と
 契り〜ゆ〜ゆ〜も、我し其方の女夫星、ゆ〜ゆ〜の文句ハ
 北初徳兵衛、屏風は為たる操の、這観板も同じ人所も矢
 張梅田を〜心中〜死ぬ者と、白痴と〜れ〜笑ぐ居た
 ぐ、(浄瑠璃)ゆ〜ゆ〜昨日今日返も、餘所〜言〜の翌日よ
 り〜我も時の數は入る、死ぬ氣なるつたも不思議の縁

と、きわ〜小松ハ泣出し、不思議と〜ろ〜ゆ〜の悪縁意
 外る私ハ繫つ〜あんの落度ゆるいゆ〜と冥途の暗
 の道連よ、き〜とゆ〜の勿体多し、(浄瑠璃)實ハ思えと
 ぬ、あ〜ゆ〜も身も毒もゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜他
 の情死ハ人を殺すの金銀よ、つま〜死ぬが世の習ハ
 夫よひき〜ゆ〜身受ハ濟、ゆ〜も百兩ゆ〜居たゆ〜と、狗
 めがゆ〜ゆ〜捧よ〜ゆ〜夫〜死ハ心よ〜ゆ〜も戀路
 迷ふ煩惱の、犬張子ゆ〜ゆ〜の内を、其方の恩を忘る
 ぬ為し、ゆ〜燈明ま〜上〜ゆ〜と、ゆ〜ゆ〜の犬めが恨〜ゆ
 ぶ〜ゆ〜の是吠切つ〜ゆ〜ゆ〜拳が犬張子、ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

浮世形六枚屏風

も腹のせしむる人の咎るん犬張子と打倒せむ其内より
 轉び出たる百兩已やふこまらぬねの落した金怎し
 此處へ這入り居たるのねを其方の許字が頓死をも為
 るまらぬと情死するまいいふ及むぬ其方の母御
 の文何のりるが書かひるく讀ぶるやせとせ立られ
 き柳助のりる通る武士と武士との嫁約及古はいる
 ぬ此世來世よまん肌付此まらりつ居たる
 とも呵嘖と逢た目もくみ安執の雲霧と文字が消
 らぬ詮はるく讀も此世の名どろくと親子の縁も封じ
 めも切し開し文の中をん熨斗と昆布と節分のまらり

下もの祝ひ言今が冥途の放行と存知るの痛
 や母さぬ血の道りち長文書と目が暈と平生の垢き
 らひるせと子可愛さよ細々と道中息災は早く下
 待入すわらせん父さぬの六十の御壽き一門衆の振舞
 も其り下りるのち緩々と生魂の祝る一と盆
 まらぬ延しすわるを人盆はるも新精靈親子の盃
 巖尾草の露の手向と引の草葉の陰う戴くと
 御二人さぬのお歎きと想像するや何事もく追
 付愛度目りて申すわらせん賢くする人の目出度
 こし國を隔ててごさんしても無や夢見が悪からん

洋世開三木屋

四十一

日スの占ひゆめちがひ違フへとも祈ツとも返らぬ後の悔み
 ごとく、つとやの父さゆや、餘波地コガの母さるやと悶モクへ
 集コガまると泣ナクまると、左吉サキの文とを擧アゲる代其方三ミの
 し許嫁イヒナガケのゆゑあつてせん、水間宇源太ミヅマウゲンのし子息嶋の
 助、これも長々の殿さるもの、片勘氣受らるる處、この度御
 免るるれ、今往方ユクヘ穿議取中センギまでぞ人、其島之助シマノスケの戻ら
 せ次第其方ツナガと祝言イハヒコトのさせ人間ヒトと讀ヨクうけり、小首コノヘを傾カガ
 け、小松其方コノマツの網乾アホシの家中ウチノナカより、員那貞太夫ミナノサダのし慶女ウレメ
 五六イハの頃トキあつて、比艷ヒエンと名をいひ、さるる人だう、ゆゑよく
 比ヒあつてのしを知ツクりて、ごんまきと、面打オモちりるその處へ屏

風引退キハヒ起オキ出デる戸平コノヘ、やま、ま、あつて、比二人ヒニヒトさる、死シるふと
 覺悟ケツブするれたい、許字イヒカタへの義理ギリをうり、夫ウツのしうウでも成ナ
 まるゆ、梅田堤ウメノツツミさるしる影カゲ瞥メと見ミたゆ人起オキ戻マる様サマ子
 らさるる居イる、たると大息オホノソクつけ、落着オチツク左吉サキのゆゑり、苦
 勞ウツは為ナりたるん、何程ナニノハ士シ同志トウジさる、幼稚オチサイさるの口約束
 を、變改カヘカヘするさる、ぬと、時代の淨瑠璃スルリさるさる、よ、よ
 りや頭カビも斬キるさる、ゆゑも高タカを括クる居イるが、死シぬる態サマし
 て、さるさるのい、ゆゑ、小松コノマツが真實マコトりたるのを誠マコトく見ミや
 うたあつて、さる、幸サイい結締ムスビの、島の助シマノスケといぬれ、さる、さる、
 墓目ツツミの論ロより、片勘氣蒙カガキる、二君ニキミは仕シつて、武道ブダウを、つと、つ

と、さる、さる、さる

の、の

浮世狂ひへまゝ居まど主人の情思親の慈悲寐たる由
 志をぬ故郷の戀しさ此文を見ぬるべし我身の歸參か
 るひしるゝつ迄もまゝいしゝ市人まゝ朽果んそれと
 ゝふのも其方の蔭心の誠が届ぬときわく小松を飛
 立ちしとき戸平も共よ勇立歌川屋の裏川岸が地客
 待間まゝくくこやううた屋根舟の挑灯をらる打
 消磔とまらげえし百兩包不思議するらんじま
 らら屏風の陰が話しを承る貴郎の黄金犬は打ん
 る磔のへ仕まゝくゆゆも犬張子犬がくろんが宝が
 出る繪解の艱苦の昔しく昔し話しの花咲屋今まゝ一

期祭へん吉瑞お嬉しかり小松きぬしをだ立たる
 その慶へ尋ねぐんが柳助お花起戻り始終をき無事
 と怡ぶ歸參を悦ぶ隣のまゝ祝儀の浄瑠璃常盤か
 きたの真木のつづ絶びつとせも萬々年治まる民こ
 そ目出度くれ斯く小松左吉柳助ら急ぎらぬく下
 るれれ絶く久き親子の對面その歡び更まひつ
 らはるゝ由覺へび殿も御悦喜限るゝ數多の祿を
 給る元の水間島之助も起歸り小松と婚禮首尾ま
 ゝのひ戸平おまゝ彼米屋の跡を継ぎ何れも父
 母も孝行を盡しければ男女數多の子を儲け愛をまこ

...

...

このみ重^{カサ}るうりまめがたし

洋世形六枚屏風 畢

發行 書林

全	大坂心齋橋通	伊丹屋善兵衛
全	東京日本橋通二丁目	敦賀屋九兵衛
全	芝神明町	須原屋茂兵衛
全	横山町三丁目	山城屋佐兵衛
全	浅草茅町二丁目	須原屋新兵衛
全	下谷数寄屋町	岡田屋嘉七
全	本町三丁目	和泉屋吉兵衛
全	日本橋四丁目	和泉屋金右衛門
全	小石川大門町	須原屋伊八
		岡村屋庄助
		上州屋宗七
		和泉屋半兵衛
		鴈金屋清吉板

010190518294

